

アンデスにおける地方博物館とその課題：サン・ペドロ・デ・アタカマ（チリ）とアンコン（ペルー）での活動事例から

市木尚利
立命館大学非常勤講師

1. はじめに

現在、博物館では、「持続可能な開発目標（SDGs）」について考え、実践していくきっかけとなる活動が重視され、非常に大切なものになっている。

歴史的に振り返ると、博物館は文明化の過程で発展し、文明化された国民（民族）を視覚化する装置として普及していった。

以下のように、日本でも岩倉使節団によって、博物館の役割が理解されていた(久米 1978)。

博古の室室ニハ、英国及ヒ各国、古来ノ石器、玉器、銅器、磁器ヲ集ム、瑞典ノ地ヨリ掘出セル古器ヲ、「スカンテネビエン」ノ古物ト云、・・・（中略）・・・博物館ニ観レハ、其開国ノ順序、自ラ心目ニ感触ヲ与フモノナリ、・・・（中略）・・・真ニ目視ノ感ハ、耳聴ノ感ヨリ、人ニ入ルコト緊切ナルモノナリ、・・・(pp.113-115)

しかし、近代的な、国民間・個人間の優劣・差別化を進めていく役割から脱却していくことが、現在の博物館に求められるものの一つになっていると考えられる。地域史が具体化していく中で、各地域の社会的コンテクストに応じた活動が必要とされている。

さらに、法的環境についても考慮しておかなくてはならない。国際条約、協定から、国内の法律など、様々なレベル法的整備が進んでいる [Van Hooff 2002]。

しかし、地方分権がうたわれ、文化財保護に果たす地方行政の役割は大きくなっているはずだが、地方レベルになると脆弱性が顕著になってしまう [Puente Brunke 2006]。

そのことが、サン・ペドロ・デ・アタカマ考古学博物館（チリ）やアンコン遺跡博物館（ペルー）での活動から垣間見ることができる。課題も多いが、これからの博物館のあり方を考える手がかりが数多くある。それらを明らかにしながら、今後の課題や展望を共有することが、本報告の目的となる。

2. 地域における博物館の役割 —アンデス学校プログラムの試みについて—

2.1 民族問題

サン・ペドロの考古学博物館をめぐる民族問題を、ジャーナリストのアリエル・ドーフマンはその著書のなかで端的に述べてくれている。以下に少し長いが引用する（ドーフマン 2005）。

サン・ペドロの市民の中にはこのように博物館がミイラを展示することは、アタカマの祖父たちを堪えがたいほど冒瀆していると批難し、ミイラを大地に返すべきだと要求している人たちが少数だがいるという。・・・(中略)・・・殺すぞ、という脅迫まで来るといふ。そして先住民族のインディオの権利を守ろうとする狂信的な運動が起こり、自分たちは先住民の死者の代理であると主張しているのだという。しかし、彼らのほとんどはその死者たちがどんなふうに生活し、日々の生活をどのようにやりくりしていたか、あるいは考古学者がそれを根気よく再構築し、理解しようとしていることなどほとんど念頭にないのである。・・・(中略)・・・スペインの篡奪者のシンボルとみなしたものに対して、暴力的な攻撃を始め・・・(中略)・・・教会と教会内の聖人像を燃やそうとした。・・・(中略)・・・さらに放火犯たちはこの二月十二日、ペドロ・デ・バルディビアがサンチアゴを発見した象徴的な日に、この博物館への放火を試みた。(pp.161-162)

2002年におきたこの事件は奇跡的に火が自然消火し、未遂に終わったのである。ただ、報告者はこのような事件の存在があった雰囲気を感じ取ることができなかった。2004年になってはじめて知らされたことである。2001年から2002年にかけてこのような事件が博物館や教会で起こったようである。

こういった状況を前にして、なぜそういった事態が起きてしまうのか、その背後にあるものは何かという点について考えることは必要である。社会構造のなかで発生する問題をそのままにしておくことはできない。文化財保護をめぐるこのような問題を無視することはできなくなっていると思われる。

地域とそこでの生活の変化は著しいものである。しかし、そういった状況においても文化財が保護されるために行うべきことを考え、行動していく必要があると思われる。勿論、何をすればいいかということに、唯一の答えはない。効率性や市場原理主義が主流となる社会のなかでは、文化財保護やそれに関わって生活する人々は、中立で安定した位置を得ることはできないだろう。だからこそ、何ができるかを考え、行動していくことが求められると考えている。

どのような人であれ、生活する地域に関心や知識をもってくれる人が一人でも多くなってくること、また同時に、地域内にコミュニケーションの場を提供していくことがまず必要ではないだろうか。

次節で紹介する「アンデス学校」の取り組みはそういったことを考える上で重要なケースであると思われる。

2.2 アンデス学校

サン・ペドロ・デ・アタカマ考古学博物館では、毎年五月に一般から三十名募り、彼らを対象に半年にわたって講義が行われている。この三十名中二十五名は先住民の中から、残り五名は先住民ではない人々から選ばれた。この講義を「アンデス学校」と呼んでい

る。

この講義では、自然地理学、歴史学、考古学、文化人類学、観光学、法律（先住民の権利や自治に関する問題と関わるもの）、開発プロジェクトの立て方に関するクラスなど多岐に渡った内容を半年という短い時間に教えている。最近では、約半年という短期間では習得しきれない内容もあるので、さらに深めるために新たなコース設置を求められることもある。また、この村全体が遺跡のようなものであり、どこからでも考古資料が出土する。この博物館では地元住民や観光業者にも考古資料や文化財保存に関する講義もこのアンデス学校プログラムのなかで設けられている。

このアンデス学校は、2003年から参加し始めたが、試行錯誤の段階であった。だが、参加費用を博物館が負担することもあってか、この講義への参加を希望する人の数は年々増えていた。2005年5月には百名ほどの参加申し込みがあった。

またこの講義には、世代や経歴を問わず様々な人が参加した。文化活動、観光業、小学校などの教育機関、市役所からと多彩な人材が講義に参加し、議論を繰り返した。

何故これほどの人が集まったのだろうか？このことの意味を考えることで、地域生活の中で果たす博物館の役割を再考することもできよう。

1990年代後半以降、サン・ペドロはチリの観光政策によって年間七万人もの観光客が訪れる場所となっている。そのため、文化財や自然環境の保護が目下の重要な課題となっている。インフラ整備もまだまだ不十分であり、見えないところで環境破壊などが進んでいる。また、民族問題なども抱えている。

少しでもそういった現状の改善には、専門家だけでなく、多くの人々の異種協力が必要である。そのためにアンデス学校をプログラム化しているのだが、それでもまだまだ人材不足であると言われていた。

加えて近年、観光学を学ぶ人や観光業者の参加が大半を占めているのが実情であり、観光の発展のための講義という意味合いでしかなくなってきていた。

本来はそれ以外の人々にも参加してもらい、アタカマ地域の自然や文化、歴史について学んでほしいというのが博物館のねらいである。歴史や文化遺産が重要なのは、それらが観光資源だからという一面的でしかない。今後このような点も考えていく必要があるだろう。

確かにこのアンデス学校の取り組みは漸進的で、いくつか問題点も抱えており、大きな成果を具体的にもたらしていないが、様々な職業や世代の人々が集まることで地域の動向を知り、その中で文化財の保護・活用・継承について考える機会をつくっている。

その講義では、参加者個々の経験をもとに激しい議論がなされることもある。勿論、こういった講義に関心をなくし、やめていく人もいるが、こういったアンデス学校の取り組みは地域の中で重要な位置を占めている。ワークショップ形式で講義を進め、文化財保護について考えたり、参加者に文化財保護の業務を疑似体験させたりすることも行われている。

サン・ペドロ村の考古学博物館をめぐる社会環境は、1960年代以降変化しつづけ、現在のグローバル化のもたらす諸問題に、草の根レベルで対応しようとする試みを必要にしていた。このアンデス学校は、他の地域においても適応可能なモデルとなると思われる。

しかし、継続させていくには、このような活動を支える人材を地域で育成していくことも欠かせない。考古学者や人類学者の発案で始まったものではあるが、担当がいなくなったら、活動そのものも停滞し、中断に追い込まれてしまう。このような課題も考慮しておくことが必要である。

3. アンコン遺跡博物館の取り組み（2009年～2012年）ーアンコン（ペルー）ー

2009年からアンコン遺跡博物館と所属の考古学調査センターが行ってきた主要な事業は以下の3つである。

- 1) 新しい展示室の開設・デジタルカタログの作成
- 2) 研究者間や博物館間のネットワーク構築
- 3) 市民への普及活動

3.1 新しい展示室の開設・デジタルカタログの作成について

2008年に、アンコン協会会長に、協会創設者の一人アレハンドロ・ミロ＝ケサダ・ガルラソンドの子息ガブリエル・ミロ＝ケサーダ(Gabriel Miró Quesada)が就任した。彼はアンコン考古学調査センターを再始動させ、2009年には、40年にわたってアンコン遺跡博物館で保管されてきた遺物のデジタルカタログ化と保存事業を始めた。開始するにあたりルシア・ワトソン・ヒメネス(Lucía Watson Jiménez)を考古学調査センターの二代目ディレクターに迎え、2009年から3年間実施された。

その中で、新しい展示室の開設とデジタルカタログの作成は連動して実施された。アンコン遺跡博物館の一階倉庫には、1960年代からの発掘で出土した遺物が未調査や活用が不十分なまま保管されてきた [Kauffmann Doig 1996; Vilda 1969]。

この遺物を整理することと、1993年からフスト・カセレスが継続してきた遺物目録に新しい情報を記述すること、そして一般にできるだけ公開することを目的に、デジタル・カタログの作成がすすめられた。デジタル・カタログはインターネットが整備されている現代にあっては欠かせないものと考えられる [Childs 2002]

そして、リマのラルコ博物館をモデルに、デジタル・カタログに掲載される多くの遺物を展示し、市民への文化財普及・活用活動を目指した展示室の開設が実施に移されていったのである。

アンコン遺跡博物館が保管する遺物は、1960年以降にアンコンとチャンカイ（パサマヨ遺跡）で出土したものが主体である。一部、アンコンの住民からの寄贈品も含まれる。

2009年1月以降、現在まで遺物のデジタルカタログ化を行っている。2010年8月までに作成し終えたデジタルカタログは、土器、石器、織物、金属器、木製品、マテ製品、人骨、貝殻製品別にまとめられ、アンコン遺跡博物館のホームページで紹介されている。

3.2 ネットワーク構築

ホームページでのデジタルカタログ公開以降、様々な専門家がアンコン遺跡博物館で調査を実施した。デジタルカタログは、研究者に充実した事前調査と、現地で必要なデータを円滑に得ることを可能にしている。

オーストラリアやメキシコの研究者らとの共同研究や活動も実施された。

また、アンコン出土の遺物の多くは、アメリカのフィールド博物館、ドイツのベルリン博物館、ペルー国立考古学人類学歴史学博物館などペルー国内外に散らばって保管されている。アンコン考古学調査センターによるデジタルカタログの作成を契機にして、他の博物館と情報交換を試みるのが可能になる。

2009年以降、アンコン考古学調査センターが実施してきた活動やその成果については、ディレクターのワトソンが中心となってペルー国内外での研究集会で報告しており、コロンビア、アルゼンチンなどの研究者たちと交流を図ってきた。

フィールド・スクールも公的機関の支援を受けて実施された。外国の大学院修士課程に在籍する二名の学生が参加した。

まだまだ交流や共同研究を恒常化させるにはいたっていないが、地方博物館において専門家間の交流を促進する機会をつくっている。

3.3 アンコン市民との交流促進の試み

2009年以前から、アンコン遺跡博物館では、市民交流のため伝統舞踊や絵画教室が実施されてきた。2009年と翌年には、アンコン考古学調査センターが子ども考古学教室を行った。

アンコンは2009年を境にして、一つの大きな社会問題に直面している。アンコンの海岸に大規模港湾の建設計画が持ち上がった。アンコン区役所は、在地の伝統的漁撈文化とそれに従事して生活する人々を守るために、港湾建設反対の声明を発表した[Empresa Editora El Comercio 2010]。今後、アンコンの港建設と文化財保護の問題は、関係性を高めていくであろう。2011年7月に大規模港湾の建設の一時凍結が表明されたが、建設を支持する人たちも多く、今後の行方に注目があつまっている。

このような社会問題に直面しているアンコンのなかで、アンコン考古学調査センターが果たす役割は大きくなっていくと考えられる。現在、常設展示に漁撈文化をテーマにしたコーナーが設けられ、その重要性が紹介されている。2011年8月には、アンコン考古学調査センターは、20世紀後半以降のアンコンの漁撈文化や技術を保存することを目的に漁民たちへのインタビューも実施した。

文化財保護には、考古学者だけではなく、様々な専門家や市民たちの交流を支えるネットワークが必要である。そのネットワーク形成をアンコン考古学調査センターが担っていた。

だが、サン・ペドロの事例と同様、継続性という点では大きな課題を抱えている。

4. 課題と展望

本報告で取り上げた2事例は、どれも現在は継続していない。アンコンについては校外学習の利用は盛んであるが、研究者のネットワークが継続的になっているとはいえない。

継続的な文化財の活用とネットワークの発展を支える人材が育っていないことの表れと考えられる。このような課題は、本事例に限らず、日本でも同様であろう。

そこで、持続可能な社会を支えるグローバル人材育成の観点から、より効果的な文化財の活用が求められ始めている。日本でも同様である。

しかし、上のような人材が育つためには、考古学研究者だけが育つのでは限界がある。そこには、観光学・社会学・教育学・心理学などとの連携が欠かせなくなってくる [Ames 2001; Castillo 2000; Del Águila 2007]。

以下に、地域での人材育成とその活動を考える主な観点を挙げておきたい。

- ① 児童から大学生までに「生きる力」（高い自己肯定感）を育むことが欠かせない。文化財の保護や活用を地域で根付かせていくためには、創造的発想と困難を克服する力が備わっている必要がある。
- ② ①のためには、高い自己肯定感が育つ活動が不可欠になる。地域住民の間で、可能な限り自由・承認・尊厳の関係性を育むこともあわせて重要となる。文化財事業に限ったことではないが、組織をつくりながら、人間関係の中で活動するには、「生きる力」の土台となる高い自己肯定感を育むことが大前提になるのである。
- ③ ①、②のような課題を克服するには、正しい知識をそのまま伝えるだけでは、効果がない。情動と連動することで、知識が人々の行動と一体化しやすくなる。そのことを意識した活動が欠かせなくなる。
- ④ SDGs と在来知の観点からの人材の育成が重要となる。育成していこうとする人材が、地域にのこされてきた伝統的な「知恵」を活かし、持続可能な地域社会を目指していくことが重要になる。そのために NGO や NPO との連携も視野に入れておくことが重要である [Alfaro et al. 2007; Asciasion Grupos de Trabajo Redes 2007a, 2007b] 。

近年、考古学においてパブリックアーケオロジの分野が注目されている（松田・岡村 2012）。ただ、その実践となると、必然的に考古学の枠を超えていかざるをえない。

考古学者たちが日々の研究活動で得た成果に基づいて、立法・行政・司法の諸機関、地域住民と歩調を合わせた文化財保護や活用を実践するには、そのことを意識しておかなくてはならない。

学際的な連携を行いながら、個々人の様々な個性や能力を開発し、それを活かす社会・教育環境づくりにも寄与していくことが必要なのである。そして、将来的には個性を活かす学びの場やはたらく場を創出、あるいは「つなぐ」方向も考慮しておかなければいけないであろう。

地域で育った人材が活躍する場がなければ、育成そのものに意味がなくなってしまうかねない。グローバル・ローカルの全体的な動きの中で文化財活用と地方創生をつなげ考えていくことは重要な課題の一つなのである。そういった意味で、世界規模での SDG s が提言してきた目標は、これからの博物館での活動や文化財の活用を行う上で重要な方向性を与えてくれると考えている。

参考文献

Alfaro, Santiago, Pilar Chinchayá, and Luis Mujica

2007 *Sistematización de las Experiencias Andinas y Amazónicas de Intercambio Educativo en Ciudadanía y Liderazgo Intercultural*. Fondo Editorial, PUCP, Perú.

Ames, Patricia

2001 *¿LIBROS PARA TODOS? MAESTROS Y TEXTOS ESCOLARES EN EL PERÚ RURAL*
Instituto de Estudios Peruanos.

Asociación Grupos de Trabajo Redes (AGTR)

2007a *COMO JUGANDO : Metodología de Educación no formal con niñas y niños en trabajo infantil doméstico (TID) y el riesgo de TID* , Lima, Perú.

2007b *DARSE CUENTA : HACER ALGO Fortaleciendo a las familias de trabajadores infantiles domésticos en Pamplona Alta, San Juan de Miraflores*, Lima, Perú.

Castillo Butters, Luis Jaime

2000 El patrimonio cultural y la misión de las universidades In *Patrimonio cultural del Perú / Fernando de Trazegnies Granda [et al.] Vol.1* , Fondo Editorial del Congreso del Perú, Lima.

Childs, S.

2002 The Web of Archaeology: Its Many Values and Opportunities. In *Public Benefits of Archaeology*, edited by B.J. Little, pp.228-238, University Press of Florida, Gainesville, Tallahassee, Tampa, Boca Raton, Pensacola, Orlando, Miami, Jacksonville, Ft. Myers.

Del Águila, Inés

2007 Arqueología, educación y desarrollo de Lima Norte. In *Pasado, presente y futuro de Lima Norte ; Construyendo una identidad*. Universidad Católica Sedes Sapientiae. Fondo Editorial UCSS,

アリエル・ドーフマン

2005 『世界で最も乾いた土地 北部チリ、作家が辿る砂漠の記憶』水谷八也訳、早川書房

Empresa Editora El Comercio

2010 Consejo de Ancón se opone a la construcción de puerto en su bahía. (URL : http://elcomercio.pe/lima/661064/noticia-concejo-ancon-se-opone-construccion-puerto-su-bahia_1. 2019年5月31日アクセス)

Kauffmann Doig, F.

1996 Proyecto Arqueológico Tumbas de Ancón (I). *Arqueológicas* 23: 1-167.

久米邦武編 田中彰校注 1978『特命全権大使 米欧回覧実記（二）』岩波書店

松田陽・岡村勝行

2012 『入門パブリック・アーケオロジー』同成社

Puente Brunke, Juan Pablo Miguel Marcelo de la

2006 Derecho del Patrimonio Cultural de la Nación Material : Su protección a través de una correcta Asignación de Derechos, Tesis para optar por el Título Profesional de Abogado, PUCP.

Van Hooff, H.

2002 La convención del Patrimonio Mundial y el estado de su aplicación en los países andinos, en: *Paisajes Culturales en Los Andes. Memoria, Narrativa, Casos de estudio, Conclusiones y Recomendaciones en la Reunión de Expertos. Arequipa y Chivay, Perú. Mayo de 1998*, UNESCO

Vilda, H.

1969 Excavaciones arqueológicas en Pasamayo. Patronato del Museo de Sitio y Actividades culturales de Ancón, Lima.

現代メキシコ人の先スペイン期遺跡観とその形成過程に影響を与えた歴史的社会的背景 渡辺 裕木（国立民族学博物館）

研究背景

今日メキシコ合衆国において、先スペイン文化がメキシコ国民のアイデンティティを構成する一要素であることに関して、多様な学問分野において多角的に議論されている。19 世紀後半以降メキシコ考古学が発展し、国内の多くの遺跡が調査、修復された過程には国家の意向が大きく影響し、発掘調査プロジェクトが政治的な意味を帯びることは珍しくなかった。その結果、先スペイン期の遺産に為された修復にも、政治的あるいはナショナリズムの影響があったと指摘されている（Lara Silva 2011）。しかしその結果である現在の遺跡や遺構が、それを見る人々に与える影響について考察した研究はほとんどない。本研究では、20 世紀のメキシコ国内の先スペイン期遺跡研究、保存および活用に影響を及ぼした社会的、政治的背景と、先スペイン期文化の象徴とも言える遺跡および遺構の視覚的イメージの形成に影響を与えたと考えられる、遺跡および遺構の視覚的変遷の分析を通して、現在のメキシコ国民の「遺跡観」を明らかにしたい。

研究の目的

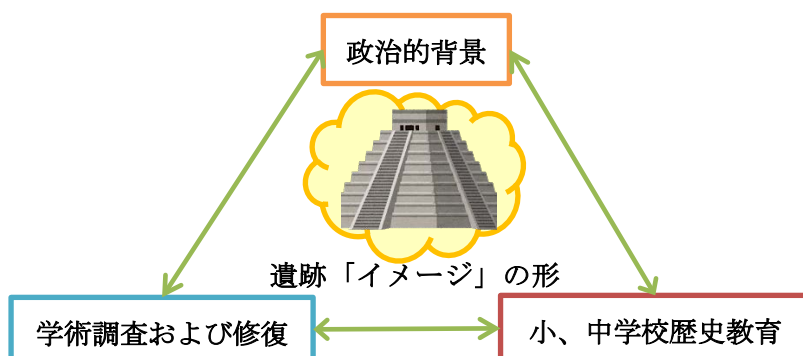
本研究の目的は、メキシコ国民が遺跡や遺構に対して抱く印象や態度（興味を持つ点、遺跡との関わり方など）、つまり「遺跡観」を明らかにすることである。現在世界の多くの国や地域において、文化遺産の開発や活用が多様化する傾向がみられるが、メキシコも例外ではない。特に観光開発などによって有効な経済資源化が見込まれる先スペイン期の遺跡においては、特に 1950 年代以降、遺跡周辺地域も含めた大規模で多様な開発が為されて来た。本研究では、遺跡および遺構の「過去の文化の証拠 (testimonio de las culturas anteriores)」としての価値、つまり学術的研究により明らかになった知見に裏打ちされた価値を損なわない保存と、展示（一般公開）による文化教育、文化普及の推進を、遺跡開発および活用の第一義的な目的と捉える（ただし、経済的、政治的、象徴的等遺跡の多彩な価値を見込んだ、それぞれの開発や活用に対するクリティカルな検討や評価は本研究の目的ではない）。以上をふまえ、本研究においてメキシコ人の「遺跡観」にアプローチすることは、次の 3 点の為に有益であると考えられる。

1. 遺跡の開発や活用の方向性が決められる重要な要因の 1 つに、メキシコ国民の遺跡に対する「期待」や「希望」がある。遺跡の学術的価値を損なわない保存および活用の実施が国民の理解、支持を得るためには、国民が遺跡をいかに捉え、遺跡に何を望んでいるかを理解することが必要である。
2. 学術的知見の紹介（文化教育、文化普及）を目的として遺跡や遺構の展示を企画する際、主たるビジターであるメキシコ国民の「遺跡観」を理解することが必要である（博物館学的アプローチ）。
3. 20 世紀の遺跡および遺構の外観の変化を分析する過程で、変化の要因であるそれぞれの修復作業に影響を及ぼしたと考えられる社会的政治的影響および、修復による変化が遺跡や遺構に付加した印象を考察することは、メキシコにおける遺跡修復の方法論の歴史的考察となる。

国民の「遺跡観」形成に影響を与えた 3 つの要素

本研究では、メキシコ国民の「遺跡観」の形成に影響を与えた主な要素を次の 3 点と定義し、それぞれについて分析を行う。

1. 社会的政治的背景：19 世紀以降、メキシコ国内における先スペイン期の歴史および文化の意味は、変遷を経つつも常に政治的関心により保護されてきた（落合 1996；木下 2017）。1930 年代後半以降は、文化人類学の諸分野が行政の一端を担うようになり（落合 1996）、国家統合を目的とした先スペイン期文化の保護と活用は常態化しており、活用の方向性にも大きな影響を持つ。また 20 世紀初頭のメキシコ革命期以降には、先住民（インディヘナ）芸術への評価が高まったが（Fabre 1996）、これは先スペイン期遺産の美学的価値の再評価にも影響があったと考える。
2. 学術調査および修復：19 世紀末期以降、現在に至るまで、常に国内各地の遺跡において考古学調査や遺構の修復が実施されている。これらの調査の成果である学術的知見が蓄積されるにつれ、先スペイン期の遺産に対してメキシコ国民が持つ印象も変化してきたと考えられる。特に修復された遺跡や遺構が国民に与える印象は、本研究で考える「イメージ」の形成に非常に大きな影響があると考えられる。遺跡調査および遺構修復（再建）のプロジェクトは、1939 年の INAH 設立以前から国家の意向により計画・実施されてきた為、1. と 2. の要素には強い関連性が推測される。
3. 歴史教育：特に初等中等学校における歴史教育のなかで、先スペイン期文化および遺跡・遺構がどのように紹介されて来たかは、メキシコ国民の先スペイン期文化観については本研究で対象とする「遺跡観」の形成に大きな影響があったと考えられる。



発表の内容

本発表では、上記の「遺跡観」形成の 3 要素のうち、「3. 歴史教育」に焦点を当て、20 世紀にメキシコの小、中学校で使われた歴史教材（教科書および付属資料）に掲載された遺跡画像の分析の進捗状況および、推察される結果を論考する。研究対象とする教材は、現在 30 代以上の国民が初等中等教育を受けた時期である 1990 年代半ばまでに発行された教科書とする。分析方法は次の通り。

1. メキシコ国立図書館や、国立公文書館等で収集した歴史教科書に掲載されたそれぞれの画像の遺跡を特定し、取り上げられた遺跡の傾向を分析する。例えば 20 世紀初期の教科書では、マヤ遺跡の画像は写実的な銅版画等が多いが、巨大建造物等が存在しないアステカの遺跡に関しては絵文書などを元に描かれた想像画が多い。
2. 遺跡の画像の種類（写真、リトグラフや銅版画等の写生画、想像画など）と、それぞれの画像の出典を調査する。20 世紀前半に出版された教科書の遺跡画像の多くは、18 世紀以降の著名なリトグラフや、銅版画、あるいは 19 世紀に出版された書籍の挿絵であるが、年代が新しくなると、発掘調査の過程で撮影されたと思われる写真やスケッチが増える。
3. 1. および 2. の結果から見られる、歴史教科書における遺跡や遺構の紹介方法の変遷と、変遷に影響を与えたと予測できる社会的政治的影響、あるいは学術調査の成果の反映状況を論考する。

INAH = Instituto Nacional de Antropología e Historia（メキシコ国立考古学歴史学研究所）

CDMX = Ciudad de México（メキシコ市）

参考文献

1. Matos Moctezuma, Eduardo. 2018. *Mentiras y verdades en la arqueología mexicana*. Secretaría de Cultura/ INAH/ Editorial Raíces. CDMX, México.175P
2. Brading, David. 1973. *Los orígenes del nacionalismo mexicano*. Ediciones Era. México DF, México. 142P.
3. Favre, Henri. 1998. *El indigenismo*. Fondo de Cultura Económica. México D.F, México. 153P.（アンリ・ファーブル 2002 年 『インディヘニスモ ラテンアメリカ先住民擁護運動の歴史』 白水社 161P）
4. Lara Silva, Adriana Cruz. 2011. *El nacionalismo como eje interpretativo del objeto prehispánico. La restauración de tres urnas zapotecas durante los siglos XIX y XX*. INAH. México D.F, México. 110P.
5. Schávelzon, Daniel. 1990. *La conservación del patrimonio cultural en América Latina. Restauración de edificios prehispánicos en Mesoamérica: 1750-1980*. Facultad de Arquitectura, Diseño y Urbanismo de la Universidad de Buenos Aires/ Instituto de Arte Americano e Investigaciones Estéticas “Mario J. Buschiazso”. Buenos Aires, Argentina
6. 2012 *Diálogo con el pasado. Recuento*. INAH, D.F, México. 284P
7. 落合 一泰（1996）文化間性差、先住民文化、ディスクリンション—近代メキシコにおける文化的自画像の生産と消費 民族学研究 61 卷 1 号 日本文化人類学 pp.52-76
8. 木下 卓史（2017）現代メキシコにおける先住民文化と帰属意識の動態化—国民統合、先住民の周縁化、深層のメキシコをめぐる試論— 応用社会学研究 No.59 立教大学 pp.185-197
9. ベネディクト・アンダーソン著 白石隆 白石沙耶訳（2007）定本 想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行 書籍工房早山 386 P